

スクールソーシャルワーカーの仕事①

高名 祐美

私は昨年度から県教育委員会所属でスクールソーシャルワーカー（以後 SSW と表記）として活動している。SSW は、「社会福祉の専門的な知識、技術を活用し、問題を抱えた児童生徒を取り巻く環境に働きかけ、家庭、学校、地域の関係機関をつなぎ、児童生徒の悩みや抱えている問題の解決に向けて支援する専門家」とされている。2008 年度文部科学省により「SSW 活用事業」が開始され、学校という領域で福祉と教育を繋ぐ役割が期待されている。

私は父親、夫が学校の教諭であったことからなんとなく教育現場の学校には関心をもっていた。そんな思いがあって、医療ソーシャルワーカーを退職したあとフリースクールの SW という職についた。フリースクールでは不登校の子どもたちと出会った。不登校にも様々な要因があることを知ることができた。一緒に過ごす時間を持ち、子どもたちの声を聴くことで、学校というフィールドでソーシャルワークを実践できたらと思うようになった。折よく、所属している社会福祉士会こども家庭支援委員会から SSW の募集があり、自ら希望したことで石川県の SSW として活動することとなった。学校の中だけでは対応がむずかしいケースに、SW としてこれまでの経験を活かすことができれば、初めての学校という領域でのソーシャルワークにわくわくしていた。

石川県の SSW は、学校に配置されるのではなく県教育委員会に所属する。学校長から教育委員会に支援依頼があると、その学校へ派遣されるシステムとなっている。私の活動地域では支援依頼がまだ少ない状況だった。活動 1 年目令和 5 年 4 月・5 月・6 月とまったく依頼がなかった。これでいいのか、アウトリーチが必要なのかと焦りも感じていた。7 月に入り、地域の教員対象研修会に出席し、SSW 自己紹介をする機会があった。それがきっかけとなり、

初めての支援依頼が私に入った。SSW としてのデビュー。不登校の事例だった。依頼内容の確認、学校でのこれまでの取り組みを聴くために学校を訪れたが、とても緊張した。その事例には 2 年目の現在も関わっている。私にとっては生涯忘れられない事例になると思う。

そして 2 年目、徐々に依頼が増えてきた。シングルで子育てする家庭のこども、発達障害があるがゆえに学校生活に馴染めず、学校も保護者も悩んでいるこども、無気力で将来に希望を見いだせない中学生、なんとか不登校を解消したいと熱心な教師などに出会った。学校でのケース会議、保護者との面接、こどもとの面接、関係機関との協働・連携をはかりつつ、課題が解決できるよう取り組んでいる。容易には解決にはいたらない事例を抱えて、どのようにアプローチしていけばよいのか、悩むことも多い。課題を抱えるこどもに出会ったからには、SSW としてその子の人生になにかしら働きかけられるよう、責任を果たしていきたいと思っている。

私の SSW 実践はまだ始まったばかり。次回からは、事例を紹介し、自分の SW 援助について振り返る機会としたい。